

時珍曰、按ずるに范成大はんせいだいが桂海志けいかいしに説ところ甚だ詳明なり。云、桂林けいりんは宣融山せんゆうざんにつゞく洞穴の中石鍾乳甚多し、仰

て石脈漏起する処を視れば即乳状あり、白うして玉雪の如し、石液融結して乳床下垂して数峰小山すほうせうざんを倒するが如し、

峰端漸く鋭て且長く氷柱の如し、杜端輕薄中空にして鷲じうの如く乳水滴瀝して已ず、且滴り且凝る、これ乳の最精

きものなり、竹管を以て仰てこれを承取る。(下略) 慎微曰、柳宗元りうそうげん崔連州さいれんしうに与る書に云、石鍾乳は草木の精なり、

土に依る山の陰陽に居り、あるひは木に近く石に附てあり、其性移りて直に石に産す、石精粗疎審辨尺時異にして、

穴の上下土の厚薄石の高下其産するもの固に一性ならず。然も其精密によつて出るもの、則油然として清く汨然と

して輝あり、其竅滑にして夷なり、其肌廉して微なり。これを食ば人をして榮花溫柔ならしむ、其氣宣流しては胃

を生じ、腸を通じ寿老廉寧なり。時珍曰、石鍾乳は陽明經の氣分の藥なり。本經曰、スハフキノボセ逆上氣を治し、目を明にし

精を益し、五臟を安じ百節を通じ、九竅を利し乳汁を下す。別録曰、氣を益し虚損を補ひ、脚弱疼冷下焦の傷竭を

療し、陰を強くす、久しく服すれば年を延べ寿を益し、顔色を好して老せず、婦人をして子あらしむ、鍊せずして、

之を服すれば人をして淋なからしむ。又曰、乳汁通ぜざるに鍾乳粉を濃煎じ用ゆ、あるひは通草と等分にして末と

し、米飯に練丸し、方寸の七にて服する事日々に三次、必驗あり。

抑当山は数峰回抱して五嶽の嵩山すうざん盧山ろざんの金芙蓉といひつべし。開山觀空上人かいざんくわんくうの塚は此後山こうざんにあり、今も読經の声風に訝

し耳底の客となりぬ。これを訪ねて山中に入れば、杉間のあらし溪の水音と変じて跡なし。都て地勢は巉々としてこれ

を攀登れば、石角に衣を釣、藤枝に首を止む、常に啼鳥稀にして、鹿の音は秋暮の淋しきを触れて山堂の眠りを覚す、猿は多くして風に吟じては峯に木づたひ、あるひは月に嘯きては断腸の思ひをのぶる。玄冬のあしたには雪深くして数尺におよぶ。鏡石といふは